

看護基礎教育における性に関する学習 —セクシュアリティの視点から戦後の看護書の記述（陰部ケア）を分析する—

水野 昌子* 福田 博美** 永石 喜代子***

*公立瀬戸旭看護専門学校

**養護教育講座

***鈴鹿短期大学

A Study Concerning Sexuality in the Basic Nursing Education An Analysis of Description The Private Parts Washing in postwar Nursing Books from Sexuality Viewpoint

Masako MIZUNO* , Hiromi FUKUDA** and Kiyoko NAGAISHI***

*Seto- Asahi Nursing College, Seto 489-0058, Japan

**Department of School Health Sciences(Nursing), Aichi University of Education, Kariya 448-8542 , Japan

***Suzuka Junior College, Suzuka 513-820, Japan

I. はじめに

看護基礎教育の専門領域の基礎看護学においては、日常生活の援助技術で教授される清潔の項目の1つとして陰部ケアがある。また、厚生労働省の示している「臨地実習において看護学生が行う基本的な看護技術の水準」¹⁾の項目として陰部ケアは水準1（教員や看護師の助言・指導により学生が単独で実施できるもの）となっている。このように陰部ケアは重要な看護ケアの1つであり、方法としては、陰部清拭と陰部洗浄があるが、近年では陰部洗浄が用いられる事がほとんどである。陰部洗浄とは、外陰部、会陰、肛門周囲を洗浄することである²⁾が、患者にとっては、清潔の意味だけでなく、恥となる経験でもあり、セクシュアリティの意味合いをもつ看護行為でもある^{3,4)}。そこで、近代の看護書の分析⁵⁾に続き第2次世界大戦後以降から、現在の看護書⁶⁾に至るまでの陰部ケアの歴史を読み解くことで内在されているセクシュアリティの教育について検討した。

尚、「看護婦」は平成14(2002)年3月施行の保健師助産師看護師（現行）法（以下、保助看法）の改正より「看護婦（士）」が男女の区別を廃止した「看護師」に名称が変更された。しかし、分析対象の文献の時代には、現行法は施行されていないので、用語の用い方としては、引用の中では「看護婦」をそのまま用いる。

II. 方法

看護と書名に書かれたものを平成20(2008)年3月に国会図書館、平成22(2010)年5月から9月に愛知教育大学附属図書館にて検索した。そのうち、陰部ケアの技術について記述のあった第二次世界大戦終戦以降から平成15(2003)年までに出版された看護書50冊を分析対象の文献とした。

文献の清潔の章を精読し、看護師養成カリキュラムから5つの時期に分け分析した。時期は、第二次世界大戦終戦後から昭和26(1951)年の保健婦助産婦看護婦養成所指定規則制定前を「戦後の混乱期」、昭和26(1951)年から昭和42(1967)年保健婦助産婦看護婦養成所指定規則改正までを「新制度の実施期」、昭和42(1967)年以降平成元(1989)年保健婦助産婦看護婦養成所指定規則改正までを「第一次改正カリキュラム実施期」、平成元(1989)年以降平成8(1996)年保健婦助産婦看護婦養成所指定規則改正までを「第二次改正カリキュラム実施期」、平成8(1996)年から平成15(2003)年までを「第三次改正カリキュラム実施期」とした。分析内容は、陰部ケアについて、目的・解剖生理、陰部の用語表現、方法、頻度、セクシュアリティの看護（性差、自分で陰部ケアを行うことの表記、羞恥心、性反応、性反応の対応）の5項目とした。

また、各時期における陰部ケアの教育を明らかにするため、インタビューを平成22(2010)年9月に10人の

看護師免許をもつ人に実施した。10人の属性は、「新制度実施時期」に看護基礎教育を受けた者1名、「第一次改正カリキュラム実施期」に看護基礎教育を受けた者4名、「第二次改正カリキュラム実施期」に看護基礎教育を受けた者5名であった。インタビューの内容は、看護基礎教育における陰部ケアについて、授業、校内演習と臨地実習の教授状況、臨床における陰部ケアの実施状況とした。

Ⅲ. 戦後の混乱期

1. 看護書の検討（表1）

5冊を分析した^{7)~11)}。目的・解剖生理が記述されたものが3冊あった。「耳の後、臍部、陰部、足指の間等皮膚の二面に接する部分は特に注意すること」¹²⁾のように3冊に皮膚の2面の接するところという解剖生理の記述が初めてみられた。陰部ケアの方法は、清拭が全ての看護書に記述されており、洗浄はなかった。清拭か洗浄かについての記述で洗浄方法らしき「患者が自分でできない場合には看護婦が陰部を洗ってあげる」¹³⁾とあるが、全身清拭の方法のなかに「患者が自分でできない場合には看護婦が陰部を洗ってあげる（中略）手早く、静かに、なめらかに平均した圧迫でしつかり洗ふ事」¹⁴⁾の文脈から「洗ってあげる」という表現は、現在のような洗浄を示すのではなく清拭が行われていたと推測する。実施者は、「仰臥位をとらせ、患者の手近に道具をおき、最後を自分でさせる」¹⁵⁾「陰部は仰臥位にし、なるべく自分で洗わせる」¹⁶⁾「仰臥位をとらせて患者に小手拭をしほってわたし、患者自身に陰部を清拭させる」¹⁷⁾のように患者に実施させ、できない場合にのみ看護師が清拭を行うと記述からは読み取れた。また、清拭の方法については、「酒精を加へた温湯に綿紗を浸し、其を絞って一局部づつ清拭するもよい」¹⁸⁾のように清拭方法として具体的に使用する物品の記述もみられた。陰部という表現は3冊に記述されていた。近代には股間など他の用語が使用され陰部という用語の使用が減っていたが¹⁹⁾、本研究では3冊に再び陰部が用いられ、この時期以降、看護書には、陰部という表現が定着したことがわかった。陰部ケアの頻度は「失禁したるとき、温湿布にて拭浄せる」²⁰⁾「1日1回は沐浴させる」²¹⁾という表記はあったが他にはなかった。

この時期の看護書における、セクシュアリティの看護は「陰部を自分で清拭させる」に、羞恥心への配慮というセクシュアリティの看護が見え隠れした。その他のセクシュアリティの看護（性差、羞恥心、性反応・対応）の記載はなかった。

この時期の陰部洗浄の記述は、戦前の内容を大きく改定することなく、そのまま使用している看護書「看護學教科書上巻」があったが、米国の本を参考にした看護書「看護實習教本」もあった。「看護實習教本」

はGHQの指導のもと開設された東京看護教育模範学院で使用するために作られた教科書であり、聖路加国際病院の「看護手順」が基になって作られ、米国の本はそのまま訳したら使えないので参考にした²²⁾という指摘もあるが、戦後の基礎看護技術のスタンダードになったものである。記述形式としては全身清拭の項では、目的、注意事項、必要物品、方法、記載事項があった。この後の教科書はこの形式をとるものが多く、記述内容も戦前までとは違い「仰臥位をとらせ、患者の手近に道具をおき、最後を自分でさせる。患者が自分で出来ない場合には看護婦が陰部を洗ってあげる。」²³⁾と具体的な実施方法が記されていた。ただし、仰臥位で自分の陰部を拭こうと思うと腹筋を要し、病氣臥床している者に適切な体位とは思われないが、以降にも仰臥位が出てくることから「看護實習教本」が陰部の清潔保持の方法として看護書に模倣されていたと考える。

2. セクシュアリティの視点から歴史的背景を踏まえ陰部ケアの記述を検討する

第二次世界大戦の終了時には様々な教育背景をもった看護師が存在した。一部の看護師をのぞいて、雑役婦のましなもの、女中まがいの仕事をするものという社会認識もあった²⁴⁾。特に医者と看護師の関係は封建的（男尊女卑）で、看護師は自分の命令に従う下女くらの認識であった²⁵⁾。当時の給与は小学校教員の初任給の約半額という低さであり²⁶⁾、60年前は看護師は学士よりも高い給与を得ていた²⁷⁾ことを考えると看護師の地位がいかに低下し、社会評価が低かったかが窺える。

一方、第二次世界大戦後の看護は、連合国軍最高司令官総司令部（以降GHQとする）の指導下で大きく変化した。当時GHQは、米国における各種の報告から、看護師が医師と対等に医療保健チームとして看護独自の役割を発揮するための制度を実施しようとした。そのため、GHQと厚生省の看護課は、医師会を封じ込め、昭和22(1947)年保健婦助産婦看護婦令の発令で高等学校卒業以上の学歴に引き上げ、国家資格とするなど法制度の改正を行った。特に、昭和21(1946)年に新制度の先駆けとして開設された東京看護教育模範学院は、米国の看護連盟によって修正された第3回カリキュラムガイドを参考に日本のカリキュラムを作成し²⁸⁾、日本における看護教育のモデルを模索した。また、看護教育の向上のため、GHQ指導のもとに厚生省主催の看護学校教務主任になるための講習会が実施され「看護實習教本」をもとに指導された²⁹⁾。ただし、印刷用紙の戦後統制のため³⁰⁾、看護書は学生には行き渡らず教員の言うことを筆記して学ぶという時代であった。当時、病院の看護の実質は学生が担っており³¹⁾、病院における看護は「入院患者の療養上の世話は家族が付

表1 戦後の看護書の陰部ケアの分析

○・・・記述あり、×・・・記述なし

時代 文献 番号	書 名	目的解 剖生理	清拭	洗浄	陰部の 表現	頻 度	セクシュアリティ				
							自分で 実施	性 差	羞恥心	性反応	性 反 応の 対応
混 乱 期	7 看護学教科書上巻	×	○	×	×	失業したとき	×	×	×	×	×
	8 新看護学上巻	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×
	9 最新簡明看護学	○	○	×	陰部	×	○	×	×	×	×
	10 看護学上巻	○	○	×	陰部	×	○	×	×	×	×
	11 看護実習教本 (Table of Contents)	○	○	×	陰部	×	○	×	×	×	×
新 制 度	34 最新簡明看護学	○	○	×	陰部	×	○	×	×	×	×
	35 最新看護学下巻	○	○	×	陰部	×	○	×	×	×	×
	36 看護必修	○	○	×	陰部	×	○	×	×	×	×
	37 写真解説看護技術基礎編	×	○	○	陰部	×	○	×	×	×	×
	38 基礎看護-原理と方法-	○	○	○	陰部	×	○	×	×	×	×
第 一 次 改 正 カ リ キ ュ ラ ム	56 看護の実際	×	○	×	陰股	×	×	×	×	×	×
	57 写真で見る看護の基礎技術	×	○	×	陰部	×	○	×	×	×	×
	58 基礎看護学新書	×	○	×	陰部	×	○	×	×	×	×
	59 新看護学3 看護の原理	×	×	×	陰部	×	○	×	×	×	×
	60 系統看護学講座23 看護の技術	×	×	○	陰部	×	○	×	×	×	×
	61 看護技術学習書	×	×	×	陰部	×	○	×	×	×	×
	62 臨床実習に必要な看護技術の基本Ⅰ	×	○	×	陰部	×	○	×	×	×	×
	63 臨床実習に必要な看護技術の基本Ⅱ	○	○	×	陰部	×	○	×	×	×	×
	64 基礎看護技術	○	○	×	会陰部	×	×	清拭のみあり	○	×	×
	65 2看護MOOK 身体の清潔	○	○	○	陰部	×	×	排渇の介助をしている患者は便器使用時に洗浄	○	×	×
	66 実践的看護マニュアル-共通技術編	○	○	○	陰部	頻度は毎日1回は励行し、排渇後も清潔にする	×	○	○	○	×
	67 看護技術学習書	○	○	×	陰部	毎日	○	×	×	×	×
	68 基礎看護技術	○	○	×	外陰部	×	○	×	×	×	×
	69 基礎看護学	○	○	○	陰部	排渇の介助をしている患者は便器使用時に洗浄	○	×	○	×	×
	70 新看護学全書14基礎看護学2	○	○	○	陰部	×	○	×	○	×	×
	83 基礎看護技術	○	○	○	陰部	×	○	×	○	×	×
	84 系統看護学講座別巻10 看護の技術	×	○	×	陰部	清拭時または排便後	○	×	×	×	×
	85 基礎看護学2基礎看護技術	×	○	×	陰部	×	○	×	×	×	×
	86 看護学大系7看護の方法(2)日常生活行動の援助技術<Ⅰ>	×	○	○	陰部	毎日1回は必ず行い、必要に応じて頻回に行う	○	×	×	×	×
	87 基礎看護技術	○	○	○	陰部	1日1回は湯と石けんで洗うことが望ましい	○	○	○	×	×
	88 系統看護学講座専門2 基礎看護技術2基礎看護技術	×	○	×	陰部	×	○	×	×	×	×
	89 基礎看護技術	○	○	×	陰部	排渇又はおむつ交換毎に清拭、1日1回陰部洗浄	×	×	清拭のみあり	×	×
	90 基礎看護学	○	○	○	陰部	×	○	×	×	×	×
第 二 次 改 正 カ リ キ ュ ラ ム	91 基礎看護技術 その手順と根拠	○	○	○	陰部	×	○	○	○	×	×
	92 安全・安楽 自立に支点をあてた看護介入技術フローチャート式行動形成ガイドⅡ	○	○	○	陰部	×	○	○	○	×	×
	93 看護技術SP1日常生活の援助第2版	×	○	×	陰部	×	○	×	○	×	×
	104 系統看護学講座専門2 基礎看護技術2 基礎看護技術	○	○	○	陰部	看護者が必要性を判断	○	○	×	×	×
	105 看護技術グラフィックガイド	×	○	×	陰部	×	○	×	×	×	×
	106 アーシングマニュアル15臨床看護技術編基礎看護技術マニュアルⅡ	○	○	○	陰部	排渇のつど清拭・洗浄を行うのが望ましい	○	×	清拭のみあり	×	×
	107 基礎看護学2基礎看護技術	○	○	×	陰部	毎日1回は必ず行い、必要に応じて頻回に行う	×	×	×	×	×
	108 ひとりで学べる基礎看護技術08A	○	○	○	陰部	×	○	○	○	×	×
	109 看護技術学習書第2版	×	×	×	陰部	×	○	×	清拭のみあり	×	×
	110 新基礎看護学 改訂版	○	○	○	陰部	×	○	×	×	×	×
	111 考える基礎看護技術Ⅱ看護技術の実際	○	○	○	陰部	×	×	×	洗浄のみあり	○	○
	112 新体系看護学全書18基礎看護学3基礎看護技術	○	○	×	陰部	×	×	×	×	×	×
	113 考える基礎看護技術Ⅱ看護技術の実際	○	○	○	陰部	×	×	×	洗浄のみあり	○	×
	114 演習・実習に役立つ基礎看護技術 根拠に基づいた実践をめざして	○	○	○	陰部	×	×	×	○	×	×
	115 新版看護学全書13基礎看護学2基礎看護技術	○	○	○	陰部	×	○	×	○	×	×
	116 基礎看護技術 その手順と根拠	○	○	○	陰部	×	○	×	○	×	×
	117 新版看護学全書13基礎看護学2基礎看護技術	○	○	○	陰部	×	○	×	○	×	×

表2 陰部ケアのインタビュー結果

新制度の実施期	
<ul style="list-style-type: none"> 「看護は、教科書が無くて、先生が作られたプリントが配られて学習した。全身清拭は学内演習で、学生が互いに石けんを使ってお湯とタオルで行った記憶があるけれど、陰部の清拭はなかった。陰部洗浄は教えられていなかった。臨床実習の清拭で記憶に残っているのは、側臥位に体位変換したとき患者さんの頭がベッド柵にあたりそうになったのを臨床実習に付いて来られていた先生がさっと庇われ、患者さんにまるで子どもに語りかけるように優しく話しかけられたことを覚えている。しかし、陰部の清潔保持を行った記憶はない。それこそ、自分でできる人にタオルを渡したことはあったかもしれないけど、拭いた覚えはない。昭和 33(1958)年入学」 	
第一次改正カリキュラム実施期	
<ul style="list-style-type: none"> 「学内で清拭は石けん清拭を学生が互いに練習し、全身を拭いたけど、陰部はやっていない。陰部清拭の具体的な方法を学内で学んでいない。陰部は大切なところだから患者さんにタオルを渡し拭いてもらって下さいと習った。臨床実習でも陰部洗浄は経験していない。学生時代、婦人科でバイトをしていたが、そこでは陰部洗浄をしていた。昭和 42(1967)年入学」 「温湯清拭を学んだ。陰部清拭は自分で行ってもらった。陰部洗浄は学んでいない。実習でも同様で、自分で拭いてもらった。実習場所では、保温機にタオルが準備されていて、自分でできない患者は看護師が下用タオルで拭いていた。1975～80 年頃、病棟には保温機が置かれていた。保温機には、二つのカストが入っていて、一つは上用で、下用タオルの方にはマジックで下用と書かれていた。でも、下用タオルも上用タオルも使用後は一緒くたになっていて、洗濯も同じにしていたので、アレと思ったことがあった。毎日、清拭したかは覚えていない。陰部洗浄は行われていなかった。この後、産婦人科病棟に移った時に、一人の助産師が、診察のときにイルリガートルで陰部を洗浄しているのを見たことはあるが、全員の助産師がしていたわけではなく、基本はタオルで拭くだった。昭和 47(1972)年入学」 「養成所では陰部洗浄の授業も演習もあった。臨地実習では担当看護師に同行し見学したが陰部洗浄の実施はしていない。臨地で実施されていた陰部洗浄の対象者は留置カテーテル挿入者、寝たきりの高齢者、若い人で自分でできる人にはペットボトルを渡して自分で洗ってもらった。昭和 60(1985)年入学」 「学内の授業で、陰部の清潔については、全身清拭の順番についてと、臨床実習に行ったら色の付いた下用タオルで拭くことを習った。看護師がどのように拭くか方法は学んでいない。ただし、産科の授業では、診察のときや悪露交換などケア時に陰部を前から後へ拭くことと、3回（中央、左右）に分けて拭くことを教えてもらった。臨床実習では陰部の清拭や洗浄をしたことはなかった。昭和 60(1985)年入学」 	
第二次改正カリキュラム実施期	
<ul style="list-style-type: none"> 「授業では女性の陰部の拭き方（前から後ろ）の指導があった。実習では看護師が石けんを使った陰部洗浄をしていた。初日に看護師の行う女性の陰部洗浄を見学し、翌日に看護師の下で技術チェックを受け、その次からは一人で行った。陰部洗浄が必要な受け持ち患者には男女関係なく毎日行った。平成元(1989)年入学」 「陰部洗浄は授業も学内演習もなかった。陰部の清潔は授業では下用タオルを用いて拭くと習った。臨地実習でも下用タオルで実習していた。就職しても病院では下用タオルで実施していたが、いつかは覚えていないけど途中からボトルと綿花を使って実施したことを覚えている。平成元(1989)年入学」 「陰部洗浄の授業と演習は覚えていない。臨地実習では見学後陰部洗浄を実施した。卒業後就職した病院では陰部洗浄を普通に毎日行っていた。平成 2(1990)年入学」 「授業と学内演習で陰部洗浄を行ったかどうか記憶にない。臨地実習では下用の蒸しタオルを使って清拭したことを覚えている。就職してからは病院で1～2年したところ陰部洗浄をし始めたように思う。平成 3(1991)年入学」 「陰部洗浄は授業も演習もなかった。臨地ではおしもタオルを使って実施していた。当事アルバイトしていた病院もおしもタオルでした。就職してからは、使い回しの固形石けんと陰部洗浄ボトル、再生ガーゼを使って陰部洗浄を行っていました。平成 4(1992)年入学」 「1990 年～95 年、病院では、陰部洗浄が行われていたが、対象はオムツ使用者であり、便汚染があったときにははされていたが、全身清拭の一環ではなかった。寝たきりの人は、基本的には特殊浴で清潔が保たれていた。昭和 60(1985)年入学」 「1990 年頃、訪問看護では、普通に陰部洗浄が行われていた。必要な患者には訪問の度に看護師が陰部洗浄をした。看護師が行かない日は家族がやっていた。1993 年には、看護基礎教育において基礎看護技術の中で陰部洗浄の授業と校内演習を実施していた。昭和 47(1972)年入学」 	

添いが行っていた。³²⁾「戦後まもなくの看護婦の業務は検温であり、その他は、医師の指示で患者に処置・投薬・注射・検査をすることがほとんどであった。中略 看護独自の業務としては、ベットメイキングや食事介助・排泄介助に従事し、回診介助は指示受けの大事な場面」であった³³⁾。

ゆえに、この時期の陰部ケアは、全身清拭の一部として清拭するか、失禁時の援助として拭浄すると看護書には記述されているが、実際には病院内において、自分でできる場合は自分でさせるし、できない場合は家族が行うものであったのではなかろうかと考える。

Ⅳ. 新制度の実施時期

1. 看護書の検討（表1）

5冊について分析した^{34)～38)}。目的・解剖生理が記述されたものが3冊あった。陰部ケアの方法は、清拭が全ての看護書に記述されていた。また、陰部洗浄とみられる初めての記述が2冊あった。臀部の清拭の方法として「女子の場合は外陰部を汚染しないように前からうしろに拭く。必要に応じて、微温湯と石けんを用いて清潔にし、粉をつけて乾燥させ、マッサージして、血行をよくする。」³⁹⁾と記述されていたことから、陰部洗浄を意味する方法と推測した。また、陰部は拭き、殿部は必要時、洗って乾かす⁴⁰⁾という記述もあった。解剖生理に基づいた記述として、「耳の後、臍部、陰部、足指の間等の皮膚の2面に接する部分は、特に注意すること」⁴¹⁾のように皮膚の2面が接する部分として陰部も挙げられ^{42,43)}、注意することが記述されていたのは、先の時期に発行された「看護実習教本」と共通することであった。陰部の清潔方法の頻度は、「一日一回静かに入浴をさせる」⁴⁴⁾「隔日に、または少なくとも一週に2回の割合で全身が清拭されるように計画する」⁴⁵⁾という記述があったことから、身体の清潔保持は隔日若しくは毎日実施される技術と考えられていたようであるが、陰部の清潔への言及はなかった。また、陰部ケアの対象者は便器や尿器を使っている患者と具体的な記述があった。

セクシュアリティの看護の性差は洗浄の中で女性に限定した記述が初めてみられたが、男性の記述はなかった。自分で陰部ケアを行う記述は4冊にみられ、「便器、尿器を使っている患者さんの場合は、必ず陰部を拭く機会を与えてあげます。しほって「どうぞ」と気軽に拭くようにと渡してあげます。」⁴⁶⁾とあり、看護師の患者への心理的な配慮が今までと異なり具体的に記述されていた。ただし、セクシュアリティの看護(羞恥心、性反応・対応)の記述はなかった。

2. セクシュアリティの視点から歴史的背景を踏まえ陰部ケアの記述を検討する

この時代、医師は看護師を蔑視し⁴⁷⁾、従来の医師の小間使い程度の認識から脱していなかった。そのため、

GHQの看護スタッフが全て帰国すると、看護師は後ろ盾を失い、医師会に押され、厚生省の看護課の廃止や准看護制度など後退することとなった。

敗戦時、学校養成所は605箇所⁴⁸⁾あったが、保健婦助産婦看護婦養成所指定規則に基づいて指定されたのは99箇所に留まった⁴⁹⁾。日赤和歌山県支部では、戦時中は800名近い志願者があったが、昭和25(1950)年の新制度の応募者は27名と減少した⁵⁰⁾。このように、新制度開始から常に、看護師不足が問題になるようになった。また、看護教員の再教育が実施された⁵¹⁾が、昭和35(1960)年代1000校以上あった⁵²⁾養成機関の多くは病院付属であり、専任教員は「看護原理と実際(現在の基礎看護学に類する内容)」の教育を担当し、他の学科目の講義は病院の医師や看護師に依頼していた⁵³⁾。

一方、セクシュアリティという言葉は1964年にカルデローンらによって創設され、合衆国性情報・性教育協議会が中心となって広まった概念であり⁵⁴⁾、1960年代には老年、糖尿病患者、心臓病患者の性反応の研究がなされているが、日本の看護界においてはセクシュアリティの看護は浸透していなかった。萌芽的な研究であった老年、糖尿病患者、心臓病患者の性反応が含まれる学科目は病院の医師や看護師が担当しており、看護基礎教育においてはセクシュアリティの看護の必要性に思い至らなかったのではないかと考える。

また、看護師の仕事は処置や雑事に追われて走りまわるのみであったことから⁵⁵⁾、看護師が陰部ケアを行うことは、この時期も時間が取れず実施されていなかったと思われる。この時期に看護基礎教育を受けた人へのインタビューにおいて、「看護は、教科書がなくて、先生が作られたプリントが配られて学習した。全身清拭は学内演習で行ったが陰部の清拭の演習は行われず、陰部洗浄は教えられていなかった。臨地実習においても陰部ケアを行った記憶はない」(表2)との回答から、陰部ケアについて書かれた看護書も既にあったが、看護基礎教育においては看護書を使用せずに教育が行われており、陰部ケアの教育は手探りの状態であったと思われる。

Ⅴ. 第一次改正カリキュラム実施期

1. 看護書の検討（表1）

15冊^{56)～70)}を分析した。戦後の混乱期と新制度実施時期の間は全身清拭や失禁時の清潔法の中に陰部ケアが数行で記述されていたものが、この時期になると陰部の清潔法という項目立てがなされ、数頁に及ぶ記述がなされる本が出てきた。目的・解剖生理は9冊に記述され、陰部清拭は17冊全部に、陰部洗浄は7冊に記述されており、昭和56(1980)年に陰部洗浄としての記述が初めてみられた。陰部ケアの頻度は、毎日⁷¹⁾や1日1回若しくは便器使用時など4冊に記述されてい

た。また、陰部洗浄の頻度について「毎日1回は励行し、排泄後も清潔にする」⁷²⁾の記述が初めてみられた。

セクシュアリティの看護について性差の記述は5冊にあり、陰部洗浄の方法にも男女の違いが記述されていた。さらに、「男性は全身清拭を行うときだけでもよい」⁷³⁾と性差に言及したものもあった。羞恥心に関する記述は「また、羞恥心の伴う部分であり、じゅうぶんな清拭ができない場合が多い。羞恥心をおこさないようナースの態度に注意する。このため、家族に指導して実施させることも考えられる。」⁷⁴⁾や「清拭を行っている間看護婦は病室から出る（ただし患者のよぶ声が聞こえる範囲にいるようにする）」⁷⁵⁾があった。次に、性反応・対応に関する記述は「陰部ケアは毎日行う方が患者は心理的に受け入れやすいのでできるだけそのようなシステムにすることを配慮する。陰部ケア中に勃起することがあるが看護婦は驚いてはいけない、ごく自然な現象である。看護婦自身もリラックスし、ユーモラスな会話をしたり、ラジオを聞きながら行うなど工夫する。」⁷⁶⁾があった。さらには「睾丸など感じやすいので陰嚢は軽く洗い、陰嚢全体を洗うためにはガーゼまたはタオルを用いてペニスを持ち上げて行うとよい。ペニスは基部から先端に向かって速やかに洗い、洗浄液で十分ゆすぎ清潔なガーゼでよく拭き乾かす。」⁷⁷⁾のように具体的な男性の性反応の特徴を捉えた陰部洗浄の方法が初めてみられた。

また、陰部ケアとして6頁にわたり、目的、羞恥心への配慮、男女の陰部洗浄の方法等が具体的に記述されている画期的な記述があり、必要物品や性器の洗浄方法が具体的となった看護書があった⁷⁸⁾。セクシュアリティについては患者のみでなく「看護婦は陰部のケアに対し恥ずかしがらず、気もちの良い態度で接する。(中略)陰部ケア中に勃起することがあるが看護婦は驚いてはいけない」⁷⁹⁾といった、初めて看護師の羞恥心についても着目している記述があった。

2. セクシュアリティの視点から歴史的背景を踏まえ陰部ケアの記述を検討する

昭和42(1967)年のカリキュラム改正により、総時間数3375時間、臨地実習時間が1770時間と改正前より3分の1に減少した。これにより、病院の労働力に組み込まれていた臨地実習が教育の一つの方法となり、基礎看護技術は徒弟制度や業務見学制度により身につけてきた時代から学内における基礎看護技術の習得が求められる時代となったと思われる。さらに、看護学が4専門学科目(看護学総論、成人看護学、母性看護学、小児看護学)に体系化され、各分野は専任教員により教育が行われることとなった⁸⁰⁾。新制度開始の昭和26年には、現在の基礎看護技術が教授された「看護原理および実際」は135時間あった内容が、昭和42(1967)年改正では、看護技術は90時間と大幅に45時間も減少していた。臨地実習で経験できる内容も限られるなか、

学内での技術習得がさらにのぞまれるカリキュラムであるが、実質の学内演習時間は減少した。

一方、看護書では陰部洗浄の記述は学内演習が可能など具体的なものが出現したのは、看護師が陰部ケアを実施する時間をもったことによると考えられる。昭和48(1973)年に、一病院であるが、清拭は稀であり実施するにしてもすべて医師の指示待ちといった状況であったなかで、絶対安静の劇症肝炎患者の全身清拭を、医師を説得して実施し、初回は陰部清拭を綿花で行い、次には0.05%のクレゾール水による洗浄に変え実施していた⁸¹⁾。

昭和59(1984)年には、高分子吸水剤を使用した製品が開発された。以降、病院でも大人用紙おむつが消費されるようになり、おむつを用いた陰部洗浄が医療現場では実施される場合もあった。

また、セクシュアリティに関する研究では、昭和15(1940)年代からキンゼイ報告等が行われたが、日本の看護界のセクシュアリティに関する普及は、昭和49(1974)年に日本看護協会出版会の雑誌「看護」で特集されたのが広い視点から患者の性を捉える報告の始まりであり、成書は「性を知る」等が出版されている⁸²⁾。長らく女性がセクシュアリティについて公の場で語るのタブー視されてきたが、昭和55(1980)年頃は、女性雑誌によるセクシュアリティに関する報告、女子高生の売春や中高生の人工妊娠中絶の増加が問題視されたり、エイズの発見に伴ない学校で性教育も実施されたりと、セクシュアリティについて公の場でも論議される時代となっていた。このように社会の中でセクシュアリティが話題にされるようになり、看護教員もセクシュアリティの看護を教える重要性を認識し、学生にもセクシュアリティの教育を受ける素地が準備されたことで、陰部ケアの記述においてもセクシュアリティの要素が盛り込まれるようになったと考える。

この時期に看護基礎教育を受けた4人へのインタビューからは、1人は陰部洗浄の授業・学内演習を受けていたが、他の3人は陰部清拭の講義のみであった。また、臨地実習では、陰部洗浄の経験はなかったが、臨床に出て陰部洗浄を経験していた(表2)。臨床ではこの時期から陰部洗浄が看護師によって少しずつ患者に実施したことにより、一部の学校の授業や演習にとりいれたのではないだろうか。

VI. 第二次改正カリキュラム実施期

1. 看護書の検討(表1)

11冊を分析した^{83)~93)}。目的・解剖生理は8冊に記述があった。また、陰部ケアについて清拭の方法は11冊全ての看護書に記述があり、陰部洗浄は8冊に記述されていた。陰部ケアの頻度の記述は「清拭時又は排便後」⁹⁴⁾「毎日1回は必ず行い、陰部が特殊な状態にある場合や、汚染の状態によっては必要に応じて頻回に

行う」⁹⁵⁾「排泄又はおむつ交換毎に、陰部・殿部を温湯で清拭し、少なくとも1日1回は外陰部洗浄を行うことが望ましい。坐浴などを行ってもよい」⁹⁶⁾であった。自分ですることについては9冊に記述があった。

セクシュアリティの看護について性差の記述は、清拭と洗浄の両方ともに性差の記述があるのは4冊、清拭についてのみであるが性差の記述があったものが2冊、5冊は言及されていなかった。羞恥心に関する記述は「排泄の介助をしている患者は便器使用時に外陰部洗浄をすることが、清潔及び羞恥心の点から望ましいことである。羞恥心をおこさせないようにナースの態度に注意する。このため、必要に応じて家族に指導して家族が実施することも考える。」⁹⁷⁾「患者に羞恥心を与えないように配慮することが必要である。カーテンやスクリーンをする。」⁹⁸⁾「羞恥心への配慮としてスクリーンをする」⁹⁹⁾「スクリーンをし、処置中のカードを提示する。」¹⁰⁰⁾「患者の羞恥心を考え、自分で拭ける場合はタオルを渡す。」¹⁰¹⁾のように羞恥心の配慮を中心とした記述があった。しかし、第一次改正カリキュラム実施の時期と異なり、セクシュアリティの看護について性反応・対応の記述は全くなかった。

2. セクシュアリティの視点から歴史的背景を踏まえ陰部ケアの記述を検討する

平成元（1989）年のカリキュラム改正では、昭和50（1975）年代頃から起こったセクシュアリティの看護の教育が開き、精神保健において性の学習が初めて明記された。しかし、訳書以外には「看護と性」に関する成書は皆無に等しかった¹⁰²⁾。そのため、看護系のセクシュアリティに関する看護書が数種発行された。また、この第二次改正のカリキュラムは専門科目が全て看護学で統一され、老人看護学が専門科目に加わった。専門科目は、看護学総論が基礎看護学となり、臨床看護学総論も加わった。さらに、看護教員が中心となって看護の独自性を迫及した理論と実践の教育が求められた¹⁰³⁾。指定規則の総時間数が3375時間から3000時間に減じ、臨地実習時間は昭和42（1967）年に比較して1035時間と三分の二に更なる減少となった。一方、専門科目の授業時間は1095時間と2割増しとなり、昭和42（1967）年の改正で減少した看護学総論が基礎看護学となり150時間から300時間と倍増した。また、基礎看護技術も195時間と前の改正に比し倍以上に増加したことから、基礎看護技術は、学内での習得が今まで以上に求められるようになった。

インタビューから、陰部ケアは学内では陰部清拭の講義のみで、臨地実習においては陰部清拭を実施し、一部の学生は陰部洗浄を行っていたことがわかった（表2）。また、臨床では陰部洗浄を既に実施していたが、この時期に開始したばかりの病院もあった（表2）。

第二次改正カリキュラム実施期は、すでに陰部洗浄が実施されている病院もあったため臨地実習で見聞き

する学生があったと思われる。しかし、看護基礎教育の中では、陰部洗浄を授業の中で取り上げ、校内演習を実施している学校は一部であった。看護基礎教育の総時間数が短縮されたが、基礎看護技術の時間はほぼ倍に増え、陰部洗浄の記述が詳細になったにもかかわらず、陰部洗浄の授業・演習が行われなかったのは何故であろうか。身体侵襲性がないため臨地実習では学生が一人で陰部洗浄を実施することがあったが、多くの看護教員は経験がなかったため、学内演習を指導するに至らなかったのではないかと推察する。また、陰部洗浄の記述には第一次改正カリキュラム実施期と違い勃起など性反応についての記述が見受けられず、教員が学内導入に手探りをしていた時期であったのではないかと考える。

Ⅶ. 第三次改正カリキュラム実施期

1. 看護書の検討（表1）

14冊を分析した^{104)～117)}。目的・解剖生理については、12冊に記述されていた。陰部ケアの方法としては、清拭は13冊に記述されていた。洗浄も12冊に記述されていた。頻度については、「患者が入浴できずに過ごした期間などから看護者が必要性を判断して申し出、患者の同意を得たうえで行う。」¹¹⁸⁾「排泄のつど清拭・洗浄を行うのが望ましい」¹¹⁹⁾「毎日1回は必ず行い、陰部が特殊な状態にある場合や、汚染の状態によっては必要に応じて頻回に行う」¹²⁰⁾と記述されていた。

セクシュアリティの看護について陰部ケアの性差の記述は、清拭と洗浄の両方に記述されていたのは6冊、清拭のみは2冊、洗浄のみは4冊であった。性差の記述が清拭と洗浄のどちらにもなかったのは2冊であった。患者自身が陰部の清潔方法を実施することは、10冊に記述があった。羞恥心に関する記述は「患者に説明し、スクリーンをする。」¹²¹⁾陰部洗浄の実施目的を共有して、できるだけ安楽に行えるための協力を得る。羞恥心には配慮する。羞恥心をできるだけ少なくできるようにする。」^{122, 123)}「カーテン・スクリーンをする。陰部洗浄は患者にとって爽快がえられるケアであると同時に、羞恥心を増大させたり、自尊感情が脅かされるケアでもある。よって、実施前に説明し同意を得る。また、プライバシーの保護に十分留意する。」^{124, 125)}「患者に羞恥心を与えないように配慮する。カーテンやスクリーンをする」^{126, 127)}「羞恥心への配慮としてスクリーンをする」¹²⁸⁾があった。また、性反応・対応は、「手袋をしたり、タオルなどで間接的に触れることで勃起をしないように配慮。勃起しないように配慮する、会話をしながら実施し、注意を逸らすなど」¹²⁹⁾といった具体的記述が、第一次改正カリキュラム実施時期と同様に見出された。

2. セクシュアリティの視点から歴史的背景を踏まえ陰部ケアの記述を検討する

第三次改正カリキュラムでは、精神保健から性の学習が外され、各専門領域で性に関する学習を編成することとなった。精神保健から、セクシュアリティが外されることで、9専門領域でセクシュアリティを考えるという裾野が広がった反面、セクシュアリティの基礎をどこで実施するか、各科でどのように展開するかの責任統括者が不明瞭となる可能性が起こった。また、単位制が導入され、総時間数は、2895時間以上の講義・実習等を行うものとなり、1単位の授業時間は講義・演習・実習ともに教育機関独自に裁量されることになった¹³⁰⁾。基礎看護学は10単位となり、講義・演習の内訳も教育機関独自の裁量とされた。専任教員の配置基準が、学級担当から専門領域の担当へ変更、教員数は現行の4人以上から8人以上となり、各教員が専門領域をもつことが求められた。この時期になると、臨床で陰部洗浄を経験した看護師が教員として看護基礎教育に入るとともに、以前からいる看護教員も臨床実習等で経験し指導のノウハウを深めることが適ってきたのではないだろうか。また、第二次カリキュラム改正では精神保健に任せておいたセクシュアリティの看護を専門領域でセクシュアリティの学習を編成することとなった。その結果、陰部洗浄がテクニックや一般的な羞恥心といったセクシュアリティのみでなく性反応を起こす恐れがありセクシュアリティの看護として教育する項目だという見直しがなされ、再度、着目されることとなったと考える。

VIII. まとめ

陰部ケアについて戦後から平成15(2003)年まで5期に分けて分析してきた。戦後の混乱期には、陰部ケアは全身清拭もしくは排泄の援助で数行触れられるのみであったのが、第一次改正カリキュラム実施期には、陰部ケアだけで独立した項立てがなされ数頁におよぶ記述がされるようになった。陰部洗浄についても同時期から記述され第三次改正カリキュラムに至った。

セクシュアリティの看護について、戦後の混乱期は、近代には股間など他の用語が使用され陰部という用語の使用が減ったが、この時期以降、看護書には、陰部という表現が定着していった。羞恥心への配慮というセクシュアリティの看護が見え隠れしたが、性差、羞恥心、性反応にまでは言及されなかった。

新制度の実施期では、性差は女性に限定して取り上げられていた。自分で陰部ケアを行う記述は今までと異なり具体的に記述され、羞恥心への配慮が窺えたものの、羞恥心、性反応の記述はなかった。

第一次改正カリキュラム実施期では、陰部洗浄の方法に男女の違いや、患者の羞恥心への配慮が初めて明確に記述された。さらに、看護師の羞恥心も言及されていた。また、男性の性反応の特徴を捉えただけでなく、対応方法までも明記された。

しかし、第二次改正カリキュラム実施期には、羞恥心の配慮についての記述が中心となり性反応の記述は無くなってしまった。けれども、第三次改正カリキュラム実施期においては羞恥心の配慮についての記述が多くなり、再び性反応とその対応の記述もみられた。

本研究は、平成20(2008)年の国会図書館で検索した本と平成22(2010)年に愛知教育大学で検索した本から、論を進めていった。しかし、第二次および第三次カリキュラム改正の時期の本は多くが処分されており、年代を追って収集することが難しく、全ての看護書を分析できたわけではなかった。今後、第二次および第三次カリキュラム改正の時期の新しい文献が加われば、セクシュアリティの教育の変化についてさらに深められる可能性も残った。

最後になりましたが、インタビューに快くご協力くださいました看護師の方々に厚く御礼申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書,厚生労働省医政局看護課長通達,2003.
- 2) 日本看護科学学会第6期・7期看護学術用語検討委員会編,看護行為用語分類,日本看護協会出版会,2005,110.
- 3) 川野雅資,武田敏,看護と性 ヒューマンセクシュアリティの視点から,看護の科学社,1998,29-30.
- 4) Wood,N.Human Sexuality in Health and Illness,稲岡文昭,小玉香津子他訳,ヒューマンセクシュアリティ,臨床看護篇,日本看護協会,1993,214-215.
- 5) 水野昌子,福田博美,藤井紀子,看護基礎教育における性に関する学習 セクシュアリティの視点から近代の看護書の記述(陰部洗浄)を分析する,愛知教育大学研究報告,59(教育科学編),2010,83-89.
- 6) 水野昌子,福田博美,看護基礎教育における性に関する学習 セクシュアリティの視点からテキストの記述(陰部洗浄)を分析する,愛知教育大学研究報告,58(教育科学編),2009,43-49.
- 7) 井口乗海,看護学教科書上巻,文光堂書店,1947.
- 8) 平井文雄,新看護学上巻,鳳鳴堂書店,1949,201.
- 9) 川畑愛義,日野原重明編,最新簡明看護学,学術書院,1949,297-299.
- 10) 庄司義春編,看護学上巻,文光堂,1950,421-424,429.
- 11) 東京模範看護学院編,看護実習教本 Table of Contents,改造社,1947,62-66.
- 12) 前掲11)
- 13) 前掲11)
- 14) 前掲11)
- 15) 前掲11)
- 16) 前掲9)
- 17) 前掲10)
- 18) 前掲8)
- 19) 前掲5)
- 20) 前掲7)
- 21) 前掲10)
- 22) 看護学雑誌 創刊50周年記念 座談会 看護の50年を振り返る(2),週間医学界新聞,第2220号,1996.12.16
- 23) 前掲10)
- 24) 田中壽美子,看護婦も労働婦人である,週間医学界新聞,

- 第 2225 号,1997.1.27 看護師研究会編,看護学生のための日本看護史,医学書院,1997,68.
- 25) 看護学雑誌 創刊 50 周年記念 座談会 看護の 50 年を振り返る (1),週刊医学界新聞,第 2217 号,1996.11.25
- 26) 守屋研二,小林富美江と看護 その歴史社会学的分析,看護の科学社,1997,55.
- 27) 西里子,学士より多くの給料を得る婦人職業,女子の新職業,近代日本青年期教育叢書・第Ⅵ期 第 1 巻,日本図書センター,1993,39-41.
- 28) 小稗文子,石井範子,下田歌子の書物にみる明治・大正時代の「家庭の看護」,秋田大学医学部保健学科紀要,12 (2),105-113,200
- 29) 日本看護歴史学会編,日本の看護 120 年－歴史をつくるあなたへ,日本看護協会出版会,2008,13.
- 30) 前掲 22)
- 31) 平尾真智子,資料にみる日本看護教育史,看護の科学社,2008,96-97.
- 32) 前掲 29) 13.
- 33) 前掲 29) 59.
- 34) 川畑愛義,日野原重明編,最新簡明看護学,学術書院,1952,297-299.
- 35) 木村仁,最新看護学下巻,風間書店,1956,295-296.
- 36) 著者不明,写真解説看護技術基礎編,医学書院,1957,187.
- 37) 日野原重明編,看護必携,医学書院,1956,45-53.
- 38) 吉田時子,基礎看護-原理と方法-,メヂカルフレンド社,1960,210,314.
- 39) 前掲 36)
- 40) 前掲 37)
- 41) 前掲 34)
- 42) 前掲 36)
- 43) 前掲 38)
- 44) 前掲 35)
- 45) 前掲 38)
- 46) 前掲 36)
- 47) 大林道子,助産婦の戦後,頸草書房,1989,53-60.
- 48) 前掲 29) 6.
- 49) 保健助産師看護師法 60 年史編纂委員会編 厚生労働省医政局看護課,保健助産師看護師法 60 年史,日本看護協会出版会,2009,92.
- 50) 雪永政枝,看護史の人々 第 3 集,メヂカルフレンド社,1979,80.
- 51) 高橋美智,GHQ が推進した看護改革 看護体制・勤務体制の変遷,週刊医学界新聞,医学書院,1996,第 2217 号,1996.11 月 25 日 <http://www.igaku-shoin.co.jp/nwsprr/n1996dir/n2217dir/n2217-05.htm> (2010.8.28 閲覧)
- 52) 前掲 49)
- 53) 前掲 29) 90.
- 54) 水野昌子:看護基礎教育課程におけるセクシュアリティ教育に関する検討,3,2006,愛知教育大学修士論文未発表
- 55) 及川和男,盛岡看護学セミナー,人間として看護婦としてドキュメント盛岡赤十字病院・看護改善の十年,あゆみ出版,1981,38
- 56) 西川義方,西川一郎,看護の実際,南山堂,1968,29.
- 57) 大嶽康子編,写真で見る看護の基礎技術,メヂカルフレンド社,1969,11.
- 58) KS 新書刊行会,基礎看護学新書,金芳堂,1973,38-39.
- 59) 永井敏枝編,新看護学 3 看護の原理,医学書院,1978,40.
- 60) 縣勢津子ほか編,系統看護学講座 23 看護の技術,医学書院,1978,159.
- 61) 吉田時子編,看護技術学習書,日本看護協会出版会,1979,211.
- 62) LUCILE A.WOOD,BEVERLY J.RAMBO,臨床実習に必要な看護技術の基本Ⅰ,医学書院 1981,158-159.
- 63) LUCILE A.WOOD,BEVERLY J.RAMBO,臨床実習に必要な看護技術の基本Ⅱ,医学書院 1981,445-450.
- 64) 氏家幸子編,基礎看護技術,医学書院,1982,286,298-299.
- 65) 馬場一雄ほか編,2 看護 MOOK 身体の清潔,金原出版,1982,93-96.
- 66) 川島みどりほか編,実践的看護マニュアル共通技術編,看護の科学社,1983,211.
- 67) 吉田時子編,看護技術学習書,日本看護協会出版会,1985,288-299.
- 68) 氏家幸子,基礎看護技術,医学書院,1986,62-63.
- 69) 宮本サダ子,滝沢美恵子,楠本セツ子編,基礎看護学,学術図書出版,1987,258-260.
- 70) 内藤寿喜子ほか編,新版看護学全書 14 基礎看護学 2,メヂカルフレンド社,1989,155-156.
- 71) 前掲 66)
- 72) 前掲 62)
- 73) 前掲 58)
- 74) 前掲 61)
- 75) 前掲 59)
- 76) 前掲 63)
- 77) 前掲 62)
- 78) 前掲 60)
- 79) 前掲 63)
- 80) 前掲 29) 90.
- 81) 前掲 54) 68-74
- 82) 川野雅資,武田敏,看護と性ヒューマンセクシュアリティの視点から,看護の科学社,1997,17.
- 83) 氏家幸子編,基礎看護技術,医学書院,1990,317-318.
- 84) 永井敏枝編,系統看護学講座別巻 10 看護の技術,医学書院,1990,40.
- 85) 杉野佳江編,基礎看護学 2 基礎看護技術,金原出版,1991,134-137.
- 86) 井上幸子ほか編,看護学大系 7 看護の方法 (2) 日常生活行動の援助技術<1>,日本看護協会出版会,1991,359-365.
- 87) 内藤寿喜子ほか編,基礎看護技術,メヂカルフレンド社,1992,288-289.
- 88) 小玉香津子編,系統看護学講座専門 2 基礎看護技術 2 基礎看護技術,医学書院,1993,198.
- 89) 岡本陽子,荒井博子編,基礎看護技術,廣川書店,1993,60-61.
- 90) 菊井和子,渡邊ふみ子編,基礎看護学,西日本法規出版,1994,133-134.
- 91) 濱田幸子監修,基礎看護技術 その手順と根拠,メヂカルフレンド社,1994,336-338,339-341.
- 92) 小田正枝,青山和子,安全・安楽・自立に焦点をあてた看護介入技術フローチャート式行動形成ガイドⅡ,廣川書店,1995,306-307.
- 93) 石原幸子編,看護技術 SPT 1 日常生活の援助第 2 版,医学書院,1996,100-101.
- 94) 前掲 83)
- 95) 前掲 85)
- 96) 前掲 86)
- 97) 前掲 86)
- 98) 前掲 87)

- 99) 前掲 91)
- 100) 前掲 92)
- 101) 前掲 93)
- 102) 前掲 82) まえがき.
- 103) 前掲 29) 92.
- 104) 小玉香津子編, 系統看護学講座専門 2 基礎看護技術 2 基礎看護技術, 医学書院, 1997, 167.
- 105) 福島ミネ編, 看護技術グラフィックガイド, メヂカルフレンド社, 1997, 48.
- 106) 日野原重明編, ナーシングマニュアル 15 臨床看護技術編 基礎看護技術マニュアルⅡ, 学研, 1997, 213.
- 107) 杉野佳江編, 基礎看護学 2 基礎看護技術, 金原出版, 1998, 359-365.
- 108) 犬塚久美子編, ひとりで学べる基礎看護技術 Q&A, 看護の科学社, 1998, 44-45.
- 109) 吉田時子編, 看護技術学習書第 2 版, 日本看護協会出版会, 1999, 277-278.
- 110) 菊井和子, 太陽好子編, 新基礎看護学 改訂版, 西日本法規出版, 2001, 267-268.
- 111) 松田たみ子, 坪井良子編, 考える基礎看護技術Ⅱ看護技術の実際, 廣川書店, 2002, 366-367.
- 112) 深井喜代子編, 新体系看護学全書 18 基礎看護学 3 基礎看護技術, メヂカルフレンド社, 2002, 143-144.
- 113) 松田たみ子, 坪井良子編, 考える基礎看護技術Ⅱ看護技術の実際, ヌーヴェルヒロカワ, 2003, 366-367.
- 114) 三上れつ, 小松万喜子編, 演習・実習に役立つ基礎看護技術 根拠に基づいた実践をめざして, ヌーヴェルヒロカワ, 2003, 46-47.
- 115) 内藤寿喜子ほか, 新版看護学全書 13 基礎看護学 2 基礎看護技術, メヂカルフレンド社, 1997, 288-28.
- 116) 濱田幸子監修, 基礎看護技術 その手順と根拠, メヂカルフレンド社, 1998, 284-285, 353-355, 356-358.
- 117) 内藤寿喜子ほか, 新版看護学全書 13 基礎看護学 2 基礎看護技術, メヂカルフレンド社, 2000, 284-285.
- 118) 前掲 104)
- 119) 前掲 106)
- 120) 前掲 107)
- 121) 前掲 108)
- 122) 前掲 115)
- 123) 前掲 117)
- 124) 前掲 114)
- 125) 前掲 116)
- 126) 前掲 111)
- 127) 前掲 113)
- 128) 前掲 112)
- 129) 前掲 111)
- 130) 前掲 49) 106.

(2010年 9 月17日受理)